

2022年度第1回会員懇談会(夏の特別企画)

将棋の魅力と奥深さをめぐって

～日本将棋連盟創立100周年を迎えて～

2024年、日本将棋連盟は創立100周年を迎え、新しい将棋会館の建設や記念イベントの企画が進みつつある。同期同世代の佐藤康光九段、羽生善治九段、森内俊之九段をお招きし、峰岸真澄副代表幹事による進行の下、400年の歴史を持つ日本の伝統文化としての将棋の魅力や奥深さについて座談会形式でお話を伺った。将棋界にも大きな影響を与えているAI、プライベートまで話題は多岐にわたった。



出席者

佐藤 康光 九段

日本将棋連盟
会長

羽生 善治 九段

創立100周年事業・
東西将棋会館建設委員会 委員長

森内 俊之 九段

創立100周年事業・
東西将棋会館建設委員会 委員

進行

峰岸 真澄 副代表幹事

リクルートホールディングス
取締役会長 兼 取締役会議長

島研、自分たちの世代について

——奨励会時代、皆さんは伝説の「島研」に所属されていたそうですね。

森内 島研は島朗九段が主催する研究会です。奨励会の有段者になった頃に島九段から誘いがあり、佐藤さんにお声掛けして3人で勉強会を始めました。研究会は練習将棋を指すのがメインで、2人が指しているときは1人が記録係をやるユニークなシステムでした。2人の将棋を見ているのも勉強になり、対局にも役立ちました。その後、羽生さんも入られて4人の研究会になりました。活動期間は5年ぐらいでしたが、とても濃密な時間でした。

佐藤 島研は対局の後に検討をする時間が長かったのですが、実際に駒を動かすわけではなく頭の中で考えながら検討していたので、はたから見れば何をやっているか分からなかったでしょうね。当時はパソコンでデータを見ることもなく、自分の記憶力頼みでした。島さん、森内さん、羽生さん、いずれも記憶力がすごくて、分析力、解析力に優れていたのが印象に残っています。若いときにはこういう脳内将棋で同時に5局ぐらい対戦したこともありました。

羽生 私は2局までやったことがありますが、それ以上は無理なので全部断っています。

森内 私は3局対戦しましたが、2局は勝ったものの最後

は反則負けをしてしまいました。そのとき佐藤さんは3局とも勝利して、プロの面目を保ってくれました。

——皆さんの世代が将棋の世界を変えてきたと思うのですが、それについてどう捉えられていますか。

森内 羽生さんが活躍されて、ニュースや新聞など、それまでになかったような取り上げられ方をすることが増えてきて、将棋界の認知度が上がったと思います。

羽生 佐藤さん、森内さんを含め世代の近いところで強い棋士がたくさんいるので、すごく大変だった面はあります。一方で、棋士の世界は長期間にわたり1人で走り続けるのは大変ですが、周りに強い人がいるので切磋琢磨して来ることができました。マラソンでも1人で走るのは大変ですが、集団で走る方がタイムも伸びるし、良い結果が出る。それと似た面があります。

いろは坂事件

——インターネット上に「いろは坂事件」というものがありました。皆さんが20代の頃に起こった事件ということですが。

佐藤 私が20代半ばで車の免許を取ったばかりの頃、日光で王将戦のタイトル戦があり、せっかくだから車で行きたいと考えました。羽生さんが対局者だったので、そこで森内さんを誘って一緒に日光まで行きましたが、冬だっ



峰岸 真澄 副代表幹事



佐藤 康光 九段



羽生 善治 九段



森内 俊之 九段

たので路面が凍結し、同乗していた森内さんの寿命が縮まったということがありまして。帰りは羽生さんも一緒ということになり、初めて3人で同乗したのですが、夜の首都高でどんどん他の車に抜かれる状況でした。お二人の寿命をさらに縮めてしまったのではないかと思います。

森内 実は佐藤さんがノーマルなタイヤでいろは坂を上ろうとしていらっしゃるの、ちょっとそれは無謀なんじゃないかと申し上げて、車を降りタクシーに乗り換えて行ったので事なきを得ましたが、そのまま乗っていたら何が起きていたのか。

佐藤 森内さんに的確なアドバイスをいただいたので、今の私があるのかなと。

羽生 二日制の対局でしたので普通は泊まるのですが、早い時間に負けてしまったので、その日のうちに帰れることになりました。佐藤さんと森内さんが車で来ていたので、それだったら乗せて行ってもらおうと、一緒に帰りましたが、後になって佐藤さんが免許を取り立てで、首都高に乗るのも初めてだったと聞いて「なるほど!」と思いました。

■ 昨今の将棋人気について

——藤井聡太竜王、里見侗奈女流五冠の活躍など最近の将棋界の動きをどう思いますか。

森内 羽生さんが七冠になるか、というときにもかなり盛り上がり、マスコミなどにも取り上げられました。藤井さんの場合は四段になってすぐに連勝を重ね、対局室にもマスコミの方が押し寄せるようになり、将棋会館に人が入り過ぎて「大丈夫か」と心配するほどでした。今は五つのタイトルをお持ちで、フィクションでもあまりないような、インパクトがある出来事が続いています。将棋界としてはありがたいことです。

羽生 藤井さんは半世紀ぶりぐらいに最年少棋士の記録を塗り替えました。今は、ここ数十年の中で昇段が制度的に一番難しい時期です。それにもかかわらず記録を塗り替えたことに価値があると思います。デビューして29連勝して、歴代の記録を塗り替えたこともすごいですが、年間の勝率が8割ぐらいと、記録面、数字面が突出しています。特に

すごいと思うのは、指している将棋にミスがないところです。10代の頃はまだ粗削りで、攻めは得意だが守りは苦手とか、強い部分は突出しているけれど弱い部分があるというのが普通で、20代や30代になってから総合的に完成していくのですが、藤井さんは今の時点で完成されている。隙が見当たらない。インタビューの受け答えも、とても10代とは思えません。

里見さんはもともと女流棋士であると同時に奨励会の三段に在籍していて、あと一步のところにはいたので、実力的に編入してもおかしくありません。ただ対戦相手が新人棋士5人ということで、かなりハードルが高い。それでもガラスの天井を打ち破ってほしいと思っています。

佐藤 将棋界は「男女を問わない棋士」と「女性が対象の女流棋士」の2種類に制度が分かれています。里見さんは女流棋士でありながら、棋士の資格を得るためにチャレンジしています。資格を得るための条件は厳しく、公式戦で一定の成績を上げないとチャレンジできませんが、ここ1、2年でかなりレベルアップされたのだと思います。女流の対局のほか、棋士の公式戦でも女流の推薦枠で多く対局され、同時に編入試験の対局をすることになるので負担は大きいと思いますが、100%の力を発揮していただきたいと思っています。

■ AIと将棋

——AIを将棋にどう活用していったらいいのでしょうか。

森内 チェスでは1990年代後半にIBMの開発したディープ・ブルーというスーパーコンピューターが世界チャンピオンを凌駕する出来事があって、将棋の世界もいつかそういう時期が来るだろうと考えてはいました。AIの発展による良い面と、難しくなっている面があります。しかしこれから社会の中で起こり得ることが将棋界で早めに起きていると考えれば、それが参考となり、何かの形で世の中の役に立てば価値あることになると思います。AIの指し方を研究して強くなっていく人もいれば、自分の個性を磨いていく人もいて、その辺りは多様化の時代を迎えているのかなと思っています。

——1990年代半ばに、日本将棋連盟で棋士の皆さんにアンケートをして「AIが人間より強くなるのはいつだと思えますか」と聞いたら、人間を超えられないとか、超えるけれどいつかは分からないという声が多い中で、羽生さんは2015年と答えられたということですが。

羽生 これは私自身の見解というよりも、その頃から認知科学の世界の人たちと交流があって、「もうこれからはソフトの開発をしなくても、ハードウェアの進歩で確実に人を追い抜きますよ」という話を聞いていたので、そのままアンケートに答えたら、たまたま当たったということです。いわゆる機械学習や画像認識など、ここ10年ぐらいのAIの世界の技術革新によって、将棋のAIも飛躍的に記録が伸びました。AIは将棋を、われわれが思うような将棋として捉えているのではなく、正方形の空間の中で行われている情報処理として対処しているということですので、囲碁やチェスや他の競技に転用することも可能です。カテゴリーの枠を超えて同時並行的に発展させているというところに、AIの大きな特色があると思っています。その一方で、棋士がただAIを真似するようになってしまっただけでは棋士の存在価値、存在意義がないと思うので、私自身は発想の幅を広げるとか、アイデアの幅を広げるとか、そういう使い方が良いのではないかと考えています。これから先の若い世代の人たちは、新たな活用法や学び方なども見つけ出してくれるのではないかといいことも、ちょっと期待しています。

佐藤 ここ数年のAIの進歩によって棋士自身のアプローチの仕方が変わったと思います。ビッグデータのような形になっていますので、何が正しくて何が違っているのか、従来の勉強以上に研究する時間も膨大になったという面では、より大変な時代なのかなと思います。見る方にとってAIは絶対ではないものの、一つの指針として楽しんでいただくことが増えているように思います。ただ私自身はあまり使っていません。私の指した将棋をAIに入れると評判が悪く、勝率が50%を切ってしまいます。それでも取り入れていかなければ競争には勝ち残れないので、必要なことは取り入れつつも、人間の持つ能力を信じてやっていきたいと思っています。

——今はまだ将棋は奥深く解明されていませんが、AIが将棋を完全に解明した後、将棋はどうなるのでしょうか。



森内 プログラマーの方の話を知ると将棋のAIの力は、今は伸びてはいるけれど、解明にはほど遠いという認識のようです。その後どうなるのかは、ちょっと想像がつかないので、楽しみにしたいと思います。強いソフト同士がやっても勝ったり負けたりしているので、解明にはまだまだ遠いという認識を私は持っています。

羽生 将棋の可能性は10の70乗ぐらいといわれていますが、10の70乗というのは宇宙の原子の数と同じぐらいの可能性があるということなので、まあ当分大丈夫だろうと思います。ただ私は逆に、どのぐらい奥深いものなのか、どれぐらい難しいものなのか分からないまま、AIがこれだけ進んでも解明できないルールを400年も前に作った先人の知恵や歴史、英知を強く感じるようになっていきます。

日本の将棋の特徴

——将棋は近代的な部分と歴史的な部分がうまくミックスされた世界だと思います。

羽生 将棋はインドが発祥でチャトラングといわれている双六から始まっています。海外では基本的にマインドスポーツ、頭脳スポーツという、スポーツのカテゴリーに分けられていることが多く、中国でも体育局が管轄になっています。日本では伝統文化ということで、江戸時代は家元制度でしたから、歴史的なルーツは共通していても、社会の中での位置付けはかなり違います。日本の将棋は取った駒をもう一度使えますし、自分と相手の駒の色が同じであるのも独自の特徴です。慣習的なことでは、和服を着て、畳の部屋で、挨拶をして始まり、挨拶をして終わるところは、400年前も今も変わりはありません。しかし、技術的なことや盤上で起こることはテクノロジーの世界と同じように、古いものが新しいものにどんどん駆逐、改変され、進化していきます。

——将棋界の展望も含めて、佐藤さんから100周年記念のご紹介をお願いします。

佐藤 日本将棋連盟としては、将棋は日本の伝統文化で、世界最高の知能ゲームと自負していますので、日本全国、そして世界に向けて将棋の魅力を発信し続け、普及にまい進していきたいと考えています。将棋連盟は歴史を積み重ね、2024年に創立100周年という節目を迎えます。竣工から約半世紀経ちました東西の将棋会館も移転が決まりまして、その事業を進めている最中です。建設に向けて皆様のご支援、ご協力を賜っていますので、ぜひよろしく願います。また、これまでも会員企業の皆さまには棋戦の主催、協賛などをいただいています。将棋を通じた日本文化への貢献としてご協力を賜れば幸いです。どうぞよろしくお願い申し上げます。